

上越市だより

映画「ふみ子の海」

上巻 松川太賀雄（稲田出身）

この春、三月初めから約一ヶ月間、映画「ふみ子の海」の撮影が上越市内の各地で行われ、現地アドバイザーとして関わりました。上越市は影像を通じて上越の魅力を全国へ発信するために、映画やテレビドラマなどの撮影を誘致し支援する「上越フィルム・コミッション」を設立してバツクアップしました。

この映画は、高田盲学校で教鞭をとり盲女性自立の先達者となった粟津キヨさんの体験をもとにした、児童文学者市川信夫氏の原作「ふみ子の海」（一九九一年に児童福祉文化賞受賞）の中から、主に昭和初期、その少女期を描いたものです。

「母ちゃん、海つてきれいだ……」
「きれい」という言葉を、目の見えな
い人が使ったら、おかしいですか？



これが、この映画を通して皆さんに考えていただきたいテーマです。

そして、満開の桜花を、むしやむしやと噛み締めるふみ子の姿から、美しさを感ずる方法は千差万別であることを、皆さんに知っていただけたら幸いです。

昨年の秋からロケハンと合わせて上越の風景や自然の実景を撮り始め、三月にキャストと撮影スタッフ（約五十人）が上越に来てロケーション入りし、市民のエキストラ協力があつて牧区の明願寺をかきわきに大島区の飯田邸や大町の旧今井染物屋、仲町の宇喜世前などで撮影して、四月に予定通りクランクアップしました。

ロケハンで昭和十年頃の雰囲気がある
医院を探した時、つれあいの実家が候補
に上がったことから、台本では山本医師

として私が出演することになりました。
ヒロインふみ子（鈴木理子さん）と「あ
んま屋」の主人（高橋恵子さん）との共
演で、「臨終です」という台詞まである
のです。ふみ子の姉弟子のサタが吹雪で
行き倒れになり、医院の診察室にかつき
こまれたときはもう虫の息、というところ
から始まり、死亡を確認するまでの場
面です。

死亡確認の手順は、友人の工藤病院々
長に教示を受けて臨みました。

先ず脈を取り（手首に人差し指、中指、
薬指の三本の指を立て気味にして）、次に
胸元を上げ聴診器で心音ののびのびを確か
める。昭和十年頃の聴診器は耳におさえ
るスプリング状の物がなく、両耳の穴に
差し入れるだけでゴム管の重量を支える
のです。今にも落ちそうだったけれど、う
まく行きました。

次の瞳孔のチェックは、今ならベンラ
イトを使うのですが、当時は普通の懐中
電灯を使っていたらうと議論しながら
でした。

死亡時刻の確認も「臨終です」と言っ
てから時計を見るのか時計を見てから言
うのかなど、細部にまでこだわり、こう
して、「臨終です」が無事済みました。
監督からは「芸達者」だと褒められたの
ですが、素直に受けとめています。

映画の中に、見慣れた景色が映像化さ

れ、市長の姿や顔見知りも多々登場しま
す。完成は十月初めの予定です。お楽し
みに。

